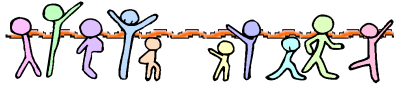


# ぼうさい



発行 平成24年2月1日 第8号  
NPO セーフティネット ぼうさい  
〒948-0003  
十日町市本町 6-3  
連絡先(代表 尾身誠司)  
電話 025-752-7353  
FAX 025-750-3670

E-mail tbk119@jeans.ocn.ne.jp

## 「災害列島日本」 尾身誠司

日本列島はどうなったのだろうか。今の状態をどう考えればいいのか分からない。誰しもそう感じていると思う。

平成16年10月23日「新潟県中越地震」を受け3年後に「中越沖地震」そして今冬は56豪雪・59豪雪を思い出させる大雪に見舞われた。一月にやむことなく降り続く雪に、慣れているとはいえ連日の雪下ろしにはまいった。2月に小康状態になりホッと一息ついた3月11日「東北地方太平洋沖地震」の発生。M9と想像を絶する「巨大地震」映像に生中継される「大津波」の恐怖。それに追い打ちをかける様に12日未明3時59分大きな揺れに度肝を抜かれた。震源は長野県北部「十日町断層帯」ではないが「信濃川断層帯」になる。長野県栄村青倉、横倉地区に甚大な被害を出したが栄村に隣接する津南町、

十日町市松ノ山、松代地区にも大きな被害が出た。

そして近年異常気象といわれる「局地的集中豪雨」をまさか十日町で受けるとは思ってもいなかった。昨年中里地区で豪雨に見舞われ土砂災害が発生していた。当地方は信濃川を抱え、消防団を中心に「水防訓練」は定期に行われており、水害の備えは大河にそがれどうしても中小河川に備えが甘い結果になった。時間雨量100ミリという豪雨は情報としては聞いていたが体験は誰しもなかった。40ミリの雨で車のワイパーを高速にしても走行が厳しいと言われていた。そのような体験は短時間であればあるかもしれない。とにかく29日121ミリという記録的豪雨は想像を絶するものだったにちがいない。外に出ようとしたが滝のように降る雨に「息苦しい恐怖を感じた」と話してくれた。田川の増水で護岸



の決壊と田川橋が崩壊したのが昭和44年それ以来の水害であった。普段水量がいくらも流れていない晒川が氾濫するとは思ってもよらなかった。何本も架かる橋は下流に行くに従い川底から高さがなくなる。土砂の崩落とともに樹木等が流れれば当然橋に引つ掛かり今回みたいな事態を引き起こす。想定外とは言えない。

「この教訓をどのように生かすか。自主防災組織の活動がどのように行われたか。避難勧告、避難指示の伝達はどうかだったか。今後また起きないとは言えずどのような対策が必要か。ハード、ソフト面から検証して行く必要がある。相次ぐ自然災害に対して私たちは防災の原点である「自分(家族)の命は自分で、地域は地域で守る」備えをする以外方法は無いのである。」



## 「震災ミュージアム視察」 〜思い出したあの日「中越大震災」〜

桑原 光江

11月27日おぢや震災ミュージアムと「川口きずな館」の視察に参加しました。これは中越大震災から7年が過ぎ、大きな震災の中で得た、多数の支援、多くの学び等々を「中越メモリアル回廊」として、長岡、小千谷、川口、山古志、堀之内、妙見、木籠の7ヶ所に整備されたものです。1箇所には纏めず分散したのは、視察に訪れたお客さんが1箇所に留まることなく、それぞれの地域を訪問し、「賑わいの場づくりになるように」の意からとのこと。

最初に見学した「おぢや震災ミュージアム」は「そなえ館」として、震災体験と教訓を活かし、今後の災害に「どう備えるか」や、地

震動シミュレータ体験、防災レクチャールーム等、子ども達も楽しみながら学べる施設と思いました。

魚沼市のホリカフーズ株式会社のレスキユウフーズを売っていたので、カレーと牛丼を買ってきました。少々高価ですが美味しかったです。いざと言う時の備えや、野外レジャーにも便利と思えました。

川口のきずな館は震災の記録復興の歩み等が解りやすく展示されていました。きずな館からの素晴らしい風景を眺めながら、皆さんで熱いコーヒーを一服、帰路につきました。7年前のあの日「10月23日」を思い出しました。「災害は忘れた頃にやってくる」と言います。一通り備える必要かと「非常防災グッズ」を、玄関先に備えては置きますが、

不要であることを祈っています。  
今回は、2箇所だけでしたが、機会を見つけて他の施設も廻って見たいと思います。



## 各自主防災組織の訓練指導について

藤木忠雄

今年も十日町市からの要請を受けて自主防災組織の防災訓練支援を行ったので、その活動を紹介したい。

十日町市による「自主防災組織リーダー研修会」が10地区で開催され、我々が支援すべく内容である、①ワークシヨップ(災害图上訓練DIG)②講話(地震、風水害の知識など)③初期消火訓練(水消火器)④応急救護(身近で出来る三角巾や担架、AEDの取り扱い)について提示された。

その一つである「災害图上訓練DIG」について、昨年は十日町市内4箇所の実施に留まったものを、今年は11地区全体に広げるため、研修会の「コマ」として各地区の区長をプレイヤーにし

て、DIGを体験してもらい、自らの自主防災組織でDIGを実施すべく意識付けを図った。また、NPOメンバーも分担して、一人1回はファシリテータをやったことで、メンバー自身の



意識も高まった。

その甲斐あって、多くの地域から指導要請があり、7月から11月まで、DIGが4回、防災講話

が5回、消火訓練・応急救護が6回、またその準備や整理等、毎週のように対応があり、メンバーのやり繰りが大変で休む暇もなかった。

「とおかまち市民活動見本市めっかめっか」では初めての試みとして、クロスロードゲームを行った。クロスロードとは 阪神淡路大震災の時の実話が基になった教材で、防災ゲームとして活用されている。内容は7人程度(奇数)の参加者に壇上に乗っていたいただき、司会者の防災に関する設問に YESかNOで回答し、多数意見の回答者には座布団一枚を配り、一人意見の回答者には座布団三枚、最後に一番多くの座布団を獲得した者が優勝者になる。いわゆる「笑点」の防災版であり、楽しんで防災意識が高められる。

今年も多くのメンバーから防

災訓練の指導に参加いただき、ありがとうございました。これが防災への備えに役立つと信じています。



## 七月二十八日豪雨災害に思う

遠藤 昭一

前例のない「ゲリラ豪雨」に見まわられて、市内も大変な被害が発生した。防災の話し合いの折に「ゲリラ豪雨」のことを危惧していた矢先だった。過去の記録にはないことでも、いざ発生したらと云う想定は今後是非必要だと思ふ。

いつも犠牲になるのは、お年寄りなどいわゆる災害弱者が多いようだ。地域の、防災関係者の、人命に対する安全の備えにより注意が必要に思ふ。

異常な降雨状況をどう察知するかは、その地元に住んでいる人にしか出来ない事情もあるが、いかに雨量情報、危険情報の注意感知を周知させるか、又、入手する方法を告知できるか、我々の指導の徹底も必要に思ふ。

土石流は山の津波とも言われるほど危険な物です。慎重すぎず、笑い話になっても良いから、十分な対応を望みたい。いち早く自主避難して頂くとか、地域の安全な場所を把握しておくとか、対策は決して無駄ではないと思ふ。今後の関係者の大きな課題として提起をしたい。

今回の状況を調査してみると、地元としては記録に無い雨量が記録されているが、それでもまだ全国に被害をもたらしている災害より、まだ雨量が少ない状況だ。はたしてどこまで予測が必要なのか、考えると気が遠くなりそうに思ふ。

防災を呼び掛けている私達にとつて、どこを基準にしたらよいかも大きな課題となりそうだが、対応しなくてはなるまい。課題は重いと思ふが、方向を見出して出来る限りの防災指導努力が必要だろう。

最後に、尊い犠牲にあわれた方へのご冥福と、被害にあわれた方へお見舞いを申し上げます。



## 編集後記

豪雪、地震、水害と、災害に見舞われた年でした。そのぶん大勢の人が、防災に関心を持ったと思います。今年は、各地区の防災訓練に参加し、会員の皆さんから、指導して頂きました。土・日曜は要請が多く、止むを得ず参加できない所もありました。災害が、起つてからでは遅いので、こういった訓練を、継続してほしいと思います。(正)

地震など自然災害は昔からあった。ただそこに住む私達の生活環境があまりにも変わったということ。便利な社会は想定外のことを引き起こす。原子化学の知識のなさをつくづく思い知らされ、末代まで放射能の恐怖を引きずることとなった。こんなことが二度と起らないように万全なる対策を願う。(せ)